



ピクタインダカン

(おさみがりにぼし)

第46号

発行日 2024年5月15日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

恩送り

ふた昔前 電話口で

心友Yは清潔なことばを話した

その声音はいつに変わらぬやさしさで

私の心に響いた

ことばは毛細血管のように

冬の心に広がり

天井のない艱難の暮らしに

希望の灯りを運んできた

はじめ

耳にした恩送り

私も感謝を送りとどける

受け取った恩は

私にはなく

だれかほかの人に与えてねと

冬の川

とある冬の午後

橋のたもとに女が佇んでいた

時折

長い髪にとまった

むつのはな
六花をはらい

白い空を見上げている

思いつめた表情で

欄干に軽く手を触れると

河川敷につづく

坂道を足早に下って行った

岸に近づくと

孤独な猫のようにうづくまって

川をのぞいている

冷たさにさらされた眼には

水面に落ちる樹影も

三角の漣も

刺々しい

女は

水鏡に

喪った子どもを幻視した

とつさに

川に手を浸し

かひ
權の手で

やさしく招きよせた

薄い背中で

子どもを抱きしめ

何度も

名前を呼んでいる

悲と哀の狭間で

心にくい込んだ虚しさも
もがき苦しんできた日々も
冬の川のように
溶ける春を待っている

鉄塔の夏

鉄塔は眠らない

暗闇のなかで

むき出しの体が震えても

灯りが消えた家々の

長い夜の眠りを

じつと見守りつつづけている

鉄塔は

時折

天を仰ぎ

光る星に視線を投げかけ

はるかな宇宙に思いをはせる

夜が明けて

朝日が昇ると

手をつないだ電線の上に

小舟のような雲

川風は心地よく

幾何学模様の鉄骨を通りぬけ

燻し銀の止まり木には

小鳥が憩う

鉄塔は遠い目で

海を眺めることがある

陽光を浴びた

風景の青さを記憶するために

ただ

一度だけ

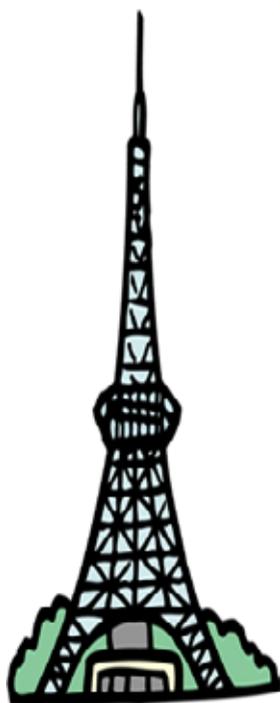
泣き声を聞いたことがある

あれは

風の言葉が

鋭く突き刺さった日だった

鉄塔は
眠れない



徒然のエチュード 43

①

両の掌に

化粧水をたつぷり取り

顔につける

うそ

眼鏡がずぶ濡れ！

矢代レイも

ここまで呆けるとはネ

②

ラジオ番組で

武田鉄矢が話していた

俳句は

皮膚で感じる

だから

皮膚を鍛える

ならば

詩は

心で感じる

だから

心の筋肉を鍛えるべき

③

久しぶりにスーツを着た
スラックスを穿く

あれ

ぴつたり！

2年前は

だぶだぶだったのに

ガーン！

翌日

クリーニングに出そうと

裏返したら

なんと左右の胴回りを縮めていた！

ほっとして

大好きなチョコ

甘い饅頭を

一気食い

大丈夫だ

④

影が

おんぶオバケのように

わたしの後に

ぴつたりついてくる

わたしが踊ると

影も踊る

影の 踊り子

【現代詩の勉強会】

●会の次第

去る五月十一日（土）、あきた文学資料館において、第十四回「ピッタの会 現代詩勉強会」を開催した。

講師は若木由紀夫氏。演題は「詩と歌の交差点」。参加者は十二名。内、詩人協会外の参加者は四名であった。

*

若木氏と連絡するなかで、「私の提供する話題で、皆さんが楽しめればいいです。」とのメールを頂戴した。このような慎重な言葉との出会いは久しいだけに、心に染みわた。

「ピッタの会」もお陰さまで十四回を数える。これからも、講師や参加者の皆さんのご協力の下、実りある会にしていきたいと考えている。

① 開会挨拶

② 講師紹介

③ 講演

④ 自己紹介

⑤ 質疑応答

⑥ 次回案内

⑦ 閉会

●アンケートより

* 若木さんの話ほどにかく面白かったです。

批評性があつて、それが自分には足りないかなど自覚してゐるんですが、人を批評すると自分にはね返つてきませんか？ 安易に何かを書けなくなるというか、そういう所を若木さんはどう折り合いをつけて自分の作品を書くのか、深掘りしたいと思ひながら聞いてました。

なじみのある歌を若木さんがどのように聞いて来られたのか、素直な話を、自分ならどの歌を挙げるのか考えながら聞けて楽しかったです。ありがとうございます。

* 昔昔、高校生の時、「高一コース」の詩の選者だった寺山修司氏が詩の身体性を強調していたのを覚えている。今回の講演では詩の

朗読や音楽性にも触れていたもので、改めてもう少し、読むだけでない詩の事も考えなければと思つた次第です。

* 今日の講演は、とても印象深いものとなりました。詩の言葉表現に音と歌が重なり、感性・情緒・風景・色さい及び空間・時間の広がりにつながっているように思え、そういうことも考慮に入れて描いてみたい気持ちです。ありがとうございます。

* しばらく振りに参加致しまして、ちょっととまどつてます。自由な時間を作つて、詩なり川柳なり、又小説に進んで行きたいと思ひます。よろしく御指導お願いします。

* 詩歌の経験豊かなお話、楽しく聞かせて頂きました。「詩」の朗読に挑戦したい、とのこれからの希望、是非進めてほしいと思います。

私は今回、ピッタの45号の感想、コピーを作ってきましたが、自由詩の批評もたいせつだなという思いからです。

* 若木さんの個性ある材料が並んでいました。あまり考えた事のない視点もあり、そういう点で参考になる部分が多かったです。もし、若木さんの次回がありましたら、詩作品を作る過程などお話しいただきたいです。

* 前回とは趣が変わって、又勉強になりました。

「女は／素早く／アクセルを踏んだ」（ピッタ45号の「蔦の家」、歯切れが良くて、とても好きです。こんな風にできたらと…心から感心します。勉強したいと思います。

* 音楽と短歌等の朗読を加えた新鮮味のあるお話でした。御自身が好きだという歌謡曲や演歌の話の中に出てくるコトバのカタチ…それが詩になるとかは別にして、いろいろな考え方があるものだともうロコがポロリ。高木恭造の「まるめる」のCDすべて聴きたいと思います!!（陽のあたりね…は好きです）。

松田氏の「矢代詩」への読みの深さに感服しました。

* 今日は、とても興味あるお話でした。歌番

組がBSで流れているので、よく聞いています。昭和の時代、共感できる歌詞がたくさんあり、昔の歌の方がよかったと思っています。「詩」と「音楽」、心の栄養になります。参加して良かったです。



【ご案内】

矢代レイ詩展 ―しなやかな言葉―

日時 7月1日(月) ～ 7月31日(水)

時間 9時～15時 無料

場所 秋田銀行本店 ロビー

秋田市山王3-2-1

なお、土曜日・日曜日・祭日はお休みです。
お問い合わせは、矢代レイまで。

☎ 090・1935・1180

【あとがき】

人間の感情には、喜怒哀楽とさまざまある。その感情を、詩でどれだけ書き表すことが可能なのだろうか。

前号の「蔦の家」では、〈怖れ〉をテーマに詩作した。不気味だという人、圧巻だという人、それぞれ評価が分かれた。

今号は〈悲しみ〉である。「冬の川」では、水や影に感情を込めた。果たして結果はどうだろうか。

*

《書きたいことを書く》、それが一貫したわたしの姿勢である。時には道に迷い、抜け出すのに時間がかかったり……。でも、幸せなことに、〈詩を楽しむ〉ことで、わたしはわたしでいられる。

